

新見荘の名請帳付農民について

著者	那須 良郎
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	11
ページ	86-94
発行年	1958-11-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/11173

新見莊の名請帳付農民について

那 須 良 郎

新見莊は個別莊園研究の対象として、すでに多くの成果をもっている⁽¹⁾。これらの研究はそれぞれの視角に於いて異なるとはいえない。その基本的に意図するところは莊園制的収取機構としての旧名体制を前提とする事によって、その過程に封建制の指標となる農奴制の成立を説明せんとするところにあるといえよう。然し、その名体制の変質、解体と小農民の自立化等々在地変化の諸現象について未だ一致した見解を見るに至ってはならず、尙多くの疑問が提起されている。例えば新見莊の文永期の名がその解体過程で如何なる位置を占めるものであるか、文永八年(一二七一)の「実檢名寄帳」⁽²⁾に記載されている帳付農民が作人を意味するのか、或いは名主と解すべきなのか、これらは在地変化を測る上の基礎的な作業であるが故に重要な問題といわねばならない。清水三男、高尾一彦、正木喜三郎氏は帳付農民を以て、一応作人として把握されているのに対して、杉山博、永原慶二氏は名主職所有者Ⅱ名田の所有者としてこれを理解されている。最近では我妻建治氏が名主職所有者として解釈されており、三好基之氏はその中間を把握られているようである。これらは元来の百姓名Ⅱ初期名(時

に、旧名又は本名とよんでいるもの)が名主一人の独占的な名請地として、莊園制的収取の基礎単位であるとともに、農業経営の基本的単位でもあり、⁽³⁾百姓名はかかる両者の統一体として名主の所有権が莊園領主から認められて成立した事情から、一名一名主形態をその基本としていた。ところが鎌倉中、末期より、⁽⁴⁾しだいにその内容を変質させて行き、本来の一名一名主形態から、一箇の名が数人の名主職所有者に分割され、一名数名主形態に移行していくという一般的理解に依拠しているものと思われる。それらは従来から「職の分化」⁽⁵⁾とよばれて来た視点であるが、然し職の分化がそのまま身分的階層分化を意味しないことは明らかであり、⁽⁶⁾その分析の限りでは名田内部の権利関係や収取関係の分析にとどまり、ために、名田のいまひとつの重要な側面である農民による農業経営実態の展開という面が不当に捨棄される結果になっていないだろうか。

小論は右のような問題認識の下に、十三、四世紀の地頭方を中心に諸実檢帳にみる帳付農民の性格について、農業生産の実際の側面を把えるべく、ささやかな考察を先学のすぐれた諸成果に導

第一表 文永八年(1271) 新見莊地頭方田畠經營面積による階層構成表

階 層	人 数	總經營面積	田 地				畠 地					
			經營面積	新 田	新田比	筆數	筆平均	經營面積	筆數	筆平均	漆	桑
10 丁 以上	5	丁反代歩 69.1.30.18	丁反代歩 8.6.30.18	丁反代歩 5.35.18	% 6.5	51	反代 1.35	丁反代歩 60.5.00	119	反代 5.05	本 582	本 9
5 丁——10 丁	10	70.1.25.18	3.6.30	6.35	18.3	21	1.35	66.4.45.18	252	2.30	582	71
2 丁——5 丁	62	188.4.05	31.2.25.18	10.2.25	25.0	243	1.15	155.6.25.18	865	1.35	1439	160
1 丁5反—2 丁	23	40.2.00	4.5.30.18	6.30	1414	46	1.00	35.6.15.18	190	1.45	1063	88
1 丁—1 丁5 反	29	38.4.45.18	8.7.10.18	2.6.25.18	30.4	91	0.45	24.7.35	146	1.35	727	107
5 反——1 丁	49	35.7.10	9.1.15	1.9.30.18	21.4	81	1.05	26.5.45	188	1.20	318	68
1 反——5 反	84	22.4.00.18	8.2.10.18	2.0.30	25.0	78	1.05	15.1.40	140	1.05	327	65
1 反 以下	33	1.4.00	5.40.18	3.40.18	65.8	16	0.20	8.05.18	19	0.20	6	—
計	295	460.4.25	74.8.05	19.2.10	25.6	627	1.10	335.6.20	1919	2.00	4462	568

階 層	人	人	人	人
10 丁 以上	5	—	—	5
5 丁—10 丁	4	—	—	10
2 丁—5 丁	42	1	6	62
1 丁5反—2 丁	14	1	8	23
1 丁—1 丁5反	23	—	6	29
5 反—1 丁	20	6	23	49
1 反—5 反	15	23	46	84
1 反 以下	1	16	16	33
計	124	47	124	295

第二表 文永八年新見莊地頭方
地目別經營構成表

新見荘の名請帳付農民について

八八

かれつゝ試みんとするものである。

(1) 戦後、新見荘そのものを個別研究の対象としたものの内管見にふれたものを次に掲ぐ。

杉山博「庄園における商業」(日本歴史講座第三卷中世篇(一))

「備中の土一揆」(歴史評論五の一)

高尾一彦「備中国新見荘」(柴田実編「庄園村落の構造」所収)

池永二郎「寛正年間における備中国新見荘」(国史学六一)

「寛正四年の備中国新見荘地頭政所焼打事件について」

(歴史学月報一六)

三浦圭一「備中国新見荘の商業」(日本史研究一九)

正木喜三郎「新見荘の名体制」(九州史学二)

「新見荘に於ける新田と農民」(九州史学九)

伊藤鄭爾「備中国新見荘の政所建築および名主・百姓住宅につ

いて」(歴史学研究一九一)

彦由一太他「中世における本所領関係の一形態」(横浜市立大

文学部協同研究一)

我妻建治「新見荘の『村落』の構成的展開」(日本歴史二二〇、

一一一)

三好基之「十三、四世紀備中国新見荘における在地変化につい

て」(史学研究六九)

新見荘の歴史地理的条件や伝領関係については、紙数の都合で一切割愛した。右論文を参照されたい。

(2)「備中国新見庄地頭方東方田地実検名寄帳」瀬戸内海総合研究会編「備中国新見庄史料」8号による。以下史料と略記す。

(3)安良城盛昭「太閤検地の歴史的前提」(1) (歴史学研究一六三)

(4)石母田正「中世的土地所有権の成立について」(歴史学研究

一四六)

(5)名田の解体と職の分化については、木村礎編「日本封建社会研究史」第一章第三節に詳しい研究史的解説がある。

(6)安田元久「日本荘園史概説」二二九頁参照

二

中世における農民の実態を把握しようとするには、まず農民層の動向が明らかにされる必要がある。この章では帳付農民の個々の性格分析よりも先に、文永八年に作製された地頭方の「田地実検名寄帳」⁽¹⁾「山里畠内検取帳」⁽²⁾及び建武元年の「損亡検見並納帳」⁽³⁾に基いて新見荘の構成的展開を分析してみたい。文永八年の諸帳に記載されている様相を集計してみると第一表の如くなる。⁽⁴⁾

これら地頭方の耕地は新見荘を南北に貫流する高梁川に沿った狭谷地帯の東部に点在していた。北の方は一部分必ずしも一円化されてはおらず領家方と入り組んで飛地になっているところもある。田地七四町八反余、畠地三八五町六反余、合計四六〇余町の地頭方田畠地はかつて六〇余の農業経営体単位の百姓名としての単位であったが、この期にはすでに二九〇余人にも分割経営される程になっている。地頭方全耕地の約八四%が畠地であることがまず注目される。わけでも里畠よりも地味の悪いと思われる山畠が断然多い。納帳によれば里畠が反別三斗代の雑穀賦課をうけているのに対して、山畠は一斗代である。こゝでは大豆、粟、蕎麦が納められている。農民生活にとって畠地が重要な位置を占めていた事は第二表の地目偏在性が下層農民ほど大きく、殊に畠のみに依存している場合が多い。経営面積一町歩以上のものは水田

畠地の両方に経営地をもち、全農民の四五%を占めている。そのうちでも二町歩前後の階層には漆、桑などの作付が集中しており、新見荘ではこの時期の比較的安定した階層のように思われる。漆桑栽培が何らかの形で農民の手もとに余剰を残す前提となつたことは充分に考えられることであり、この階層には名主層（当名主を含めた）が含まれているので、その地位を保つに何等かの意味をもつていたであらう。然しその反当り作付本数は極めて少なく、漆、桑などが検注帳に本数で数えられていることからして、桑畑などをなすことなく、畦畔や屋敷内の立木仕立のものであつたことを想像させる。古島敏雄氏も江戸時代初期以前には専門の桑畑などはほとんどなかったといつてよい、と云われており、私も当初そのまゝ受けとつてみたが、確かに「立木仕立」を想像させるように一筆の土地に数本から十数本宛のものが多く、だが具体的には次のようになかなり一ヶ所にまとまっている例も多くあるのである。

中	ウチコミ	家上	一所一反世代	重光安五郎
中	漆三百七十本			
中	漆百五十本	里昌	一所三反世代	宗蓮
中	漆五十本	里昌	屋敷内 一所五反	友貞正
中	桑四十本			

（但順不同）

漆または桑の作付されている二〇八筆（その合計面積四九町一反（二五代余）に漆桑の総立木本数五〇二〇本を分けてみると一筆当

り二四本強の割合になる。一筆の土地の広狭がはなはだしく区々であるから、それだけではなんともいえないが、ここ新見荘では重要な作物であつたことは事実で、時に貢物だけでなく、それ自身商品化することもあつたと思われる。⁶⁾その複雑な存在の仕方は尙、他の面からの検討を要するであらう。

一〇町歩以上の経営面積をもつ階層は全て田畠両方の経営地をもっているのだが、新田比や漆桑等の作付状況や免、給田畠などはいずれも少なくなつていて、この時期では余り安定した階層ではなく、経済的にはとにかく社会的には支配的位置を占めるものではなくなつていたと思われる。一方、五反以下の階層は四〇%を占めているが地目の偏在性が目立ち、殊に一反以下の階層は漆、桑などの作付が極めて少なく、諸作人の名のある筆の下には漆の存在が認められるのは僅かに一例あるにすぎない。漆桑などの栽培にはある一定の年数が必要であり、そのためには土地に対するある程度の耕作事実に基づく耕作権乃至用益権の確保が前提にならなければならない。それは下層農民にとって容易なことではなかつたろう。

水田地をみれば新田が四分の一強に相当している。その割合は経営地の小規模になるに従つて、一様に大体増加している。殊に一反以下の場合などは半分以上が新田であり、それも一筆平均が二〇代という小地片であることは注目されてよい。もちろん、新田というものが荒蕪地や荒廢地の水田化のみを意味するものではなく、畠地の灌漑などによる地目の変化をも示すものであろうことは次の史料などに充分うかがわれることである。⁷⁾

一所一反半 内里一反

唯八

里昌一所三反半 内山二反半

近藤吉光

里昌一所卅代 田成五代加定

ナオサカ 藤三郎

山皇↓里皇↓新田と地目を進化させて行つたといつても、極めて小規模に、且つ緩慢に行なわれた。これら小地片占有を足場に下層小農民が広汎に成長して来たことは、すでに、若狭国太良荘や播磨国矢野荘の場合に明らかにされている。⁽⁸⁾

ところが下層農民の成長の事実が確だとしても、水田畠地合計経営面積五反以下というものが一七名、彼らがそのみによつて生活を維持したか、否かは疑問である。稀にしか土地台帳に姿を現さない下人らと共に名主への賦役提供が彼らにとつて、相当量占めていたと思われる。この時期における新見荘に「封建的自営・農民の成立が広汎に認められる」と手放しで理解する訳には行かず、⁽⁹⁾尚、経営面積一町五反以上という階層が地頭分耕地のは、八〇%までも占めていることを考え合せて再考されねばならないと思う。「この一町五六反から二町という面積は単婚家族の自作経営には耐え得ないものであり、内部に従属的労働力の相当量を従えた家族形態をもっていることを推測させる」⁽¹⁰⁾と古島敏雄氏の豊富な実証的研究は明らかにしており、ここでは先にみたような下層農民層の成長が認められつゝも、依然として家父長制的な経営がなんらかの形で支配的であつたと思われる。

たゞし、家父長制そのものは、なんら封建的なものに対立するものではないのであり、家父長制の残存がそのまゝ封建制の成立

を否定するものではない。⁽¹¹⁾「日本封建制における家父長制的性格について」永原慶二氏は「それはしばしばルーズに生産関係そのものの側面、イデオロギーの側面の区別なく、いわば形容詞的にすら用いられる傾向」を注意されて、「かゝる家父長的諸関係をたんに遺制とか変革不徹底による残存という形でとらえるのではなく、それが封建社会の諸階級を通じて、だれの手により、いかなる形で維持され、再生産されて行くか、そののもつ意義は諸階級によつて、いかに変化しているか⁽¹²⁾を明らかにすることが重要である。」ことを指摘されている。問題は封建的小農民の成長を単婚家族労働力のみの燃焼によるものとして、強いて解釈することなく、その耕地をどういう形で集めて、それを経営していたかという点にあると思う。そこで次には以上見て来た旧名単位経営の解体を封建的小農民の上昇と家父長制的経営の継承という一見矛盾した動向を、更に帳付農民の性格分析と関連させて考察する必要が出て来る。

(1) 史料 8

(2) 史料 9

(3) 史料 33

(4) 集計方法は三浦氏にならつて、経営面積規模によつた。

三浦論文三二頁

(5) 古島敏雄氏「概説日本農業技術史」二五八頁

(6) 三浦論文三〇頁 新見主商業については杉山論文も参照

(7) 三好論文 二〇頁

(8) 稻垣泰彦氏「日本における領荘制の発展」(歴史学研究

一四九号) 宮川満氏「播磨国矢野荘」(柴田実編「庄園村落の構造」)

(9) 三浦論文 三〇頁

(10) 古島敏雄氏「日本農業史」一二七頁、比較的労働力の短期間への集中が少なくなり、労働生産性が向上した綿作の江戸時代畿内農業でも、成年労働力一人当り三反が耕作面積の基礎である。

(11) 黒田俊雄氏「安良城論文についての若干の問題」(歴史評論七四号) 二一六頁

(12) 永原慶二氏「日本封建制論」(遠山・佐藤編「日本史研究入門」)

三

農民の実態を把える上の帳付農民の性格分析にはその前提になる諸実帳の解釈が問題である。帳注帳は農民から年貢収納を行うための土地台帳であることからして、それに名請人として帳付されることはその土地に関する限り、彼は何らかの意味で年貢収納に公的に関係付けられている訳である。とは云え、実情は複雑である。その論理的分析に示唆を与えるものに「実検名寄帳」がある。各名は多様に分れており、三〇町歩以上のものから、五反以下の零細なものまであって、中には名としての機能を疑われるものまである。この帳面による構造的分析はすでに高尾氏の業績があるが、私も若干の補考を加えたい。記載形態は凡そ四類型に分けられる。例えば武忠、光依、助宗、赤子の各名である。各名には、武忠以下九人が帳付されているが如く、数人又は数十人の名請地が一筆ごとに記載されて、最早、一名一名主による統一的名請地が

把握形態は全く変化している如く見える。

各名の第一筆が伝統的百姓名の名称である事は間違いない。後述する如く武忠名の名主は武忠であり、光依名には「当名主蓮阿」の添書があって、蓮阿も共に名請地をもっているから実在が確められる。赤子、助宗の名請をみない。助宗名は散田化しているので当然だが、赤子名は散田ではない。この場合、名主赤子が存在しないか、又は農業経営より分離しているかは問題である。建武元年の「納帳」の記載は「鈴上分、赤子分」等の様式をとっている。その「分付」記載が江戸時代のそれとはその性質を異にすること勿論であろうが、この帳面が「納帳」である事と時恒名の場合に見られる如く、散田化した名では帳付農民が助宗丹大夫分同刑部分という様式をとっていることを考え合わせると、各分付は年貢貢納単位を意味している。元来名主職という土地所有権の公認は、年貢貢納が名主の責任においてなされた、その反対給付としての性格がある事からして、各名の名称は実質的には年貢貢納責任者、即ち名主を示すものと考えられる、従って名請地をもたなくとも名主赤子は実在していたと考えて差支えないであろう。

「当名主何某」の添書については多く議論がある点で、私などが早急に結論を引出しえぬは勿論であるが、中でも、正木氏の「現名主がその名に臨んでからの時間的に新しい場合に添書されたもの」とする規定は注目されてよいのではないか。多くの点で教えられたのだが、唯、当名主をして旧名解体後の徴税吏的性格とか特定の公事負担者の性格などを以て一般名主との区別がつかないとしても、正木氏の集計でも明らかに名請高は名主に比して相対

的に高位にあり、且つ、殆んどの当名主が名請帳付されているなどしているから、その間に何らかの性格的相違が認められてもよいのではないか。⁽²⁾

これは当名主の添書をもたない有力名主武忠が図師給をうけて下級庄官をしていたのに示される如き従来の名主が伝統的な名主職を保留することによつて一応の地位を維持していたのとは異り、新たに帳付農民として名請地を集積して抬頭したものであらうと思われる。在地での現実的優位が彼らをして名主として確認させ、年貢徴収貢納の権利と義務を負わせしめるに至つたのである。この事は従来の単に名主による収納形態から新たに、直接名主以下の農民を帳付して年貢負担を公的な義務とさせ、名主にそれら年貢の徴収貢納の義務を保持せしめて、年貢収納をより一層確実なものにする形態に移行した事と機軸を一にしている。在地変化に伴う新しい情勢への庄園領主支配の一对処が窺われる。

かくて、名主、当名主の名請帳付農民の性格が問題である。彼らの中には稀にしか姿を現わさぬ下人の農民から、名主に賦役提供の代償として自己の請作地をもつに至つた名主的農民、旧名の分解や散田化過程に名請地を獲得して小経営を行う新興小農民などが含まれている。前章で階層構成を名主職所有者だけに依らず経営面積によつて、その動向をさぐつたのは名主職所有者だけではその下に記載されている請作人（単に下層と規定できない）の成長を看過する事になると考えたからである。それには彼らが直接の経営耕作者であることが確認されねばならぬ。

土地台帳としての実検帳は一筆の土地に関するあらゆる事項を記載したものである事は帳面に実際に検注したと思われる日付が

あり、漆・桑などが立木の大小まで記入されているなどで明らかである。⁽³⁾「正」という記載が問題の鍵になる。本来、名に於ける正が領主直営地としての性格をもつ正作又は佃の解消したものである場合には、即ち農民の賦役労働の給付として存在している場合合には、それは各名毎の均等賦課割付か、又は名田率割付を原則としている。⁽⁴⁾更に又領家佃のような場合はその性格として公事を免ぜられる免田という形をとる。地頭佃なら門田形態をとつて除田の中に数えられるのが一般であらう。⁽⁵⁾地頭方で正記載を含む名は一六名にすぎず、面積も比率もまちまちである。右に見た原則の各名毎、均等割付乃至名田率割付などどれも示さない。しかも免田にも、除田にも数えられていない。三浦圭一氏はこれを領家佃として把握されているが若しそうだとすると、佃の斗代は一般より高いのが普通であるから、少しは高くなければならぬ。正記載を多くもつ友請名が四斗五升代——六斗代、同じく正を三筆もつ浄念名が六斗五升代であるのに対し、正記載を含まぬ赤子名ですら約六斗代であり、その差を認めえない。例えば黒島莊の庄田賦課率三斗代である時、佃のそれは反別一石五斗であり一般には一石代から二石代といわれており、領家佃と考えるには余りにも低過ぎるであらう。⁽⁶⁾以上の性格からこれを領家佃若しくは地頭正作田と解釈する事は出来ないのである。名主自身による直接経営地と理解してよいであらう。名主正作田とする右の見解が確認されるならばそれと同列的に帳付されている名請農民はその土地の経営者であり、耕作事実を示すものと考えるのは自然であらう。その権益は作職を意味する。事実的には既に、この名請農民の下に

その土地を更に下請作する者が帳面に姿を現わしている。その場合耕作事実は後者にあるのは勿論である。この期の検注には、現実の直接耕作関係まで把握する必要があった。従つて、
加摩里

一所 二反り 末弘 正末貞⁽⁷⁾

などの如く正の下に作人が記されても、名主正作田を否定する訳ではないと思う。⁽⁸⁾

弥五郎の名請帳付状況は小論の結論を導き出す。この弥五郎については高尾氏が名子的隷属農の一類型として扱えられた。

一、友清

一所十代 正

一所二反十代 弥五郎

一所二反廿代 正

一所卅代 正

一所一反廿代 正

一所四十代 正

一所一反十代 正

一所一反廿代 正

一所一反十代 正

一所二反廿代 同弥五郎

已上一丁三反四十代

正記載を友清の正作地として解釈する点では一致するが弥五郎の名子的性格云々については如何であろうか。第三表に見る如く、決して友清の統制下ばかりに存在していた訳ではなく、田畠合せで六町八反余にも及ぶ耕地をもち十一名にも跨っている。これだ

新見荘の名請帳付農民について

けでも名子的農民でない事を示しているが、名子的隷属農民と呼ばれる場合、特定の名主の下に隷属させられているのが一般的だったのではないかと思うから、若し弥五郎が友清に対して名子的立場にあるならば得永、重行名などの別の名主の下で名請地をもちえただろうか。この様な傾向は一人弥五郎だけに限らない。むしろ新見荘の一般的傾向であつた。⁽⁹⁾ 荘園領主による年貢公事などの荘園制収取機構として、又それと関連して名主の土地所有単位として名体制というものが現実に向、意義を持ち続ける時、弥五郎たちの名請帳付農民は各名にわたる土地を確保して、多くの名主と請作関係を結ぶ事に依り特定の名主との私的隷属関係を稀薄化しているのを示そう。これは下層農民が成長するための前提だ

第三表 弥五郎名請状況

名 の 名 称	水 田		畠 地	
	反	代	反	代
友 得 重 赤 宗 友 武 近 是 武 道 弥	4.30			
	2.40			
	25		5.20	
	1.25		6.20	
	1.10			
			2.40	
一 小 計			1.20	
			1.00	
			20	
合 計	1.00	30	1.00	30
	6町8反	15代		

つたと云える。弥五郎の経営面積六町八反余には当然家父長制の大経営を推測させる。奴隷制の名主のか否か判らぬが、重要なことはその担い手が必ずしも伝統的名主たちではなくって、新興

